

予察調査から見えるカメムシ類の発生動向

病害虫防除対策担当 松本はるか

1 概要

病害虫防除対策担当（病害虫防除所）では、防除を要する病害虫や防除対策を生産者等に情報提供するため、農作物に重大な被害を与える16作物167病害虫について、発生動向を調査しています。

これら調査データから見えてきた近年の病害虫発生動向のうち、注目されるミナミアオカメムシについて情報提供します。

2 情報提供内容

(1) 「ミナミアオカメムシ」の発生動向

作物を加害するカメムシ類には多くの種類があり、予察調査では4作物のべ13種のカメムシ類を主な対象として、県内計31か所のほ場で調査しています。そのうち、近年特に増加してきたカメムシとして「ミナミアオカメムシ」が挙げられます（写真1）。

本虫は熱帯から温帯地方南部に広く分布し、本県では2020年に初めて多数の生存個体が確認され、令和2年7月27日付けで「病害虫発生予察特殊報」を発表しました。関東（1都6県）では2022年12月時点で、群馬県を除く全域で発生が確認されています（図1）。

本県の予察調査では大豆ほ場や果樹予察灯で多発を確認しており、年々ほ場における確認数が増加しています（図2）。今年度の予察調査では、8月末～11月初旬まで大豆ほ場内で本虫が確認されています。また、所内大豆ほ場においても9月中旬～12月初旬まで本虫が確認されています（図3）。

(2) 加害の特徴と防除対策

本虫は水稻、大豆、野菜類、果樹類等広範囲な作物を加害する比較的大型のカメムシで、加害量も多く、水稻では1日あたりの斑点米発生量が他種と比較して多くなります（図4）。このため、斑点米被害の拡大や加害時期の長期化が懸念されます。

大豆では、他の吸実性カメムシ類は子実肥大期に加害するのに対し、本虫は子実が固くなる大豆成熟期まで加害します。このため、本虫の確認されたほ場では防除適期とされている8月下旬～9月中旬の子実肥大期に加え、9月下旬～10月中旬の薬剤防除が必要となります。

3 今後に向けて

予察調査の中で、種の構成の変化やそれに伴う新たな対策の必要性が見えてきました。今回はカメムシの事例を紹介しましたが、他の病害虫についても発生動向を調査しています。ホームページやSNSなど様々な形で情報発信を行っていますので、ぜひ本担当が発表する情報を御活用ください。

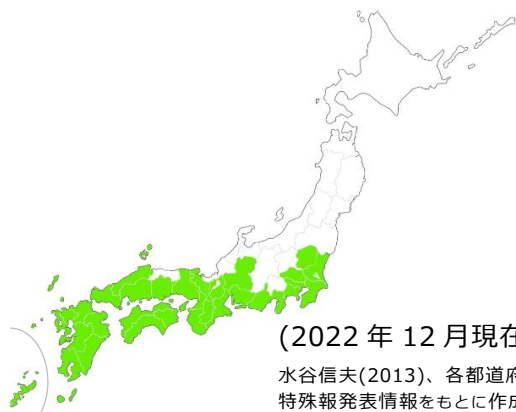


写真1 ミナミアカメムシ成虫(体長約15mm)と大豆 図1 ミナミアカメムシの発生が確認された都道府県

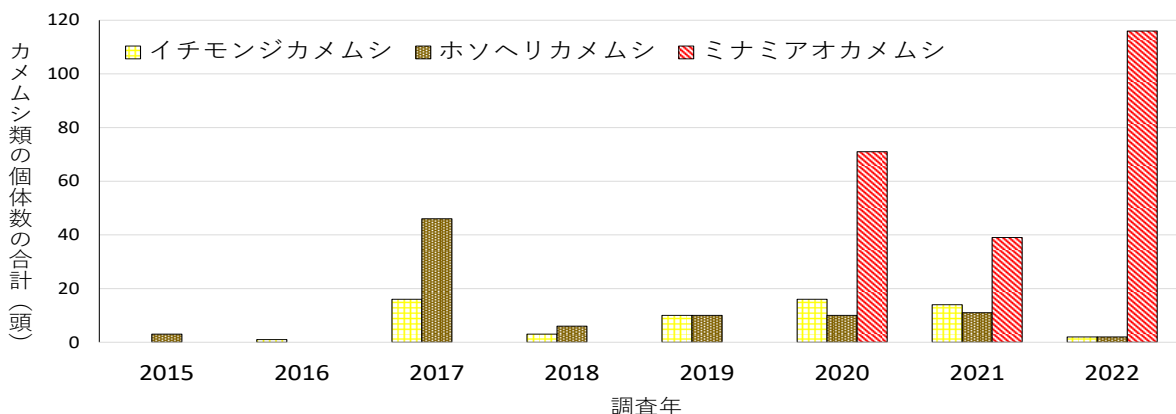


図2 大豆予察ほ場で確認された主要な吸実性カメムシ類

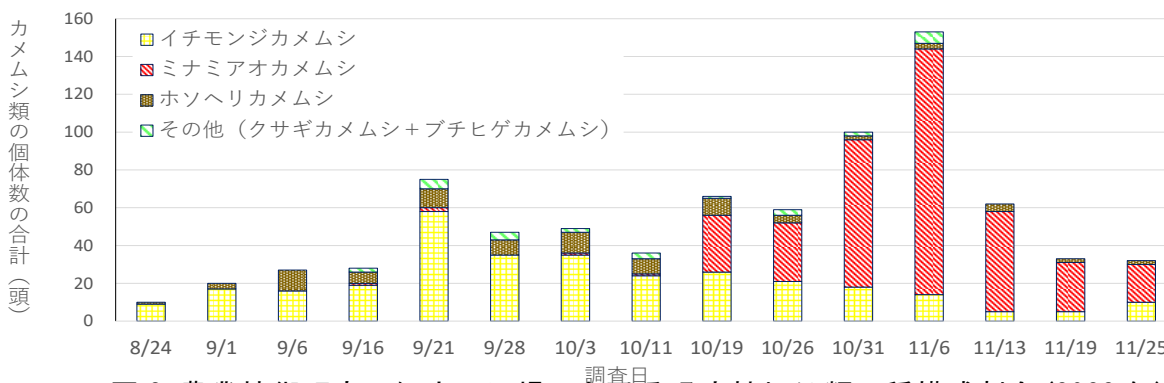


図3 農業技術研究センター大豆ほ場における吸実性カメムシ類の種構成割合(2022年)

※病害虫研究担当調査データをもとに作成

1頭1日当りの斑点米発生量(粒) 川沢ら(1975)
原色図鑑カメムシ百種(1975)より引用

0.11 - 0.5
(粒/日)

ホソハリカメムシ

0.06 - 0.1
(粒/日)

イネホソミドリカスミカメ
(アカヒゲホソミドリカスミカメ)

0.51 - 1.0
(粒/日)

ミナミアオカメムシ

0.01 - 0.02
(粒/日)

糲

※A4印刷時実寸大

病害虫防除所HP
↓詳細は[こちら](#)
にアクセス!

図4 主要な斑点米カメムシ類の1日あたり斑点米発生量

埼玉県マスコット
「コバトン」「さいたまっち」